

接続表現を中心とした論理語彙の活性化—段階的育成プログラムの開発—

開田 晃央(茨城大学教育学部附属中学校 教諭)

1 研究の背景と本研究の目的

現在の国語科教育の研究テーマとして、「理解語彙」と「使用語彙」に関する研究が行われつつある。しかし「理解語彙」や「使用語彙」に関する研究は個別的に行われる傾向にあり、「理解語彙」と「使用語彙」の両方をテーマにした研究はあまり進んでいない分野である一方、「接続表現」は多くの研究者が注目しており、研究対象として重要な意義を持つことがうかがえる。しかし、「論理語彙」としての「接続表現」に着目したテーマは管見では見あたらない。よって本研究は研究の進んでいる「接続表現」の分野の中でも、新しい研究であり、今後の研究に影響を与える位置づけにあると考える。そのため、接続表現を中心とした論理語彙を使えるようになるための教育的手段について研究することとした。本研究の目的は、次の通りである。

- a) 接続表現を中心とした論理語彙の活性化の段階を体系化する。
- b) 接続表現を中心とした論理語彙を活性化する授業プログラムを開発し、その影響力を検証する。

2 研究方法

- a) については、個人の主観的な評価でなく評価するプログラムに入れる切り口になる。接続表現を中心とした論理語彙の思考過程を、「類推」「因果」「想定」「関連付け」「類型」「比較」「序列化」などで分類し(作業仮説)、「活性化」の段階を構造化・可視化することで体系化を進める。
- b) については、接続表現を中心とした論理語彙を活性化するための段階を追った授業プログラムを開発する。a)の体系化された接続表現を中心とした論理語彙を、活性化させていくために習得・活用の段階を踏んだ授業プログラムの有効性を作文データから実証する。授業プログラムを取り扱う前に、600字程度の題名や内容を示し、一定の枠組みをもたせた作文を書かせる。授業プログラムを実践した後に、リライトする。授業プログラム実践前後の作文データを比較分析することで、接続表現を中心とした論理語彙の活性化に資する授業プログラムの影響力を実証する。

3 研究成果

a)については、本研究では、接続表現に含まれる思考様式を「関係付け」とし大きく一括りとして扱い、その中で、「因果」「比較」「分類」「具体」「抽象」という思考様式ごとに接続表現を分類した。「想定」については、「因果」と重なる部分が多く、分類する上でぶれが生じるために外した。また「序列化」については、複数のカテゴリに分けてラベリングすることから「分類」として扱うことにした。「具体」で分類されるのは「例えば」「具体的には」など、後続文脈で具体的な事例を述べるときに使われる接続表現である。「抽象」とは、「つまり」「要するに」など、先行文脈で述べられた個々の事柄を後続文脈でまとめるときに使われる接続表現である。以上5つの思考様式を含む接続表現について構造化・可視化した体系として、並列ではなく、集合関係となりそうだとことが分かった。

b)については、接続表現を中心とした論理語彙を、活性化させていくために習得・活用の段階を踏んだ授業プログラムを開発した。授業プログラム実施前後に書かせた同条件の作文データ等の分析結果を示した。「しかし」を作文能力の差の指標にすることで、本研究での授業プログラムが、平和作文のリライトに関してある一定の影響を与えている。その影響は、文章構成に特化しており、特に「しかし」という逆接の接続詞を用いることは、学習者の中での思考の整理を可能にしていると考えられる。よって、本授業プログラムが一つの文章作成能力に対して有意な教育効果を表している。

4 今後の課題

a)については、大枠での分類が見えてきたが、今後体系の細部へ向けての研究が必要となる。また、その体系の中で、「書くこと」という限定にはなるが、作文データから、学年によって活性化が進行している接続表現と停滞している接続表現について研究を進めていきたい。

b)については、今回は、「しかし」を指標として授業プログラムの影響を示したが、今後、「しかし」以外の接続表現を指標とした場合の分析や、ほぼ同じ母集団に対して平和作文を継続的に書かせてデータ化し、経年変化をとることで、改善を加えた授業プログラムによる成果を検証していきたい。